話題の本の著者に聞く **新著** の読みどころ ▶ 『直観力と哲学なき経営は淘汰される』著者

城北化学工業 社長 **大田友昭氏**

# 次の世代へ贈る考え方のヒント

今年8月に刊行された「直観力と哲学なき経営は淘汰される」（ギャップジャパン刊）が話題だ。独自の経営哲学に加え、生き方や考え方のヒントを得られると幅広い読者の支持を集めている。著者である城北化学工業社長の大田友昭氏に同書の読みどころを聞いた。

――なぜ本書を執筆したのですか？

会社のPRになれば、というのが主な理由ですが、2人の息子への「生き方に関する遺言」のつもりで書きました。

私は父の急逝により36歳で会社を継ぎました。経営について父から何も教わっておらず、当初は試行錯誤の繰り返しでした。そのため本書には具体的な経営ノウハウに加え、歴史や哲学に学び、実践した結果から得られた考え方のヒントを多く盛り込みました。

――例えばどのようなものですか？

経営者にとって大切なことは、まず「自分を忘れる」ことです。これまで培ってきたモノの見方や考え方には偏りや癖、おごりがあります。意識的に自己否定することで、虚心坦懐（たんかい）に最善の選択ができるようになるのです。

事業に影響を与える変化の兆しをつかむためには、自分だけの時間をつくることが重要です。直観やひらめきは、移動中など精神が自由に遊んでいる瞬間に訪れます。経営者はそうした瞬を つくるべきで、ひらめきの土壌になる教養も深めなければなりません。

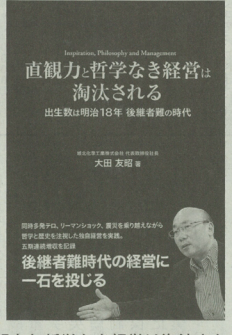
現代はとかくポジティブであることを良しとする風潮がありますが、「陽」があれば「陰」もあるのが物事の道理です。常に全力では疲弊してしまいます。経営も無茶な利益を追求するよう事業の継続が大切。懸命に努力したらしっかり休息し、調子が悪いときはそれなりのかじ取りを工夫する。道理をわきまえた手綱さばきが求められます。

――本書ではそうした経営哲学や考え方について書かれています。

当社が扱う精密化学添加剤には「これがなければ最終製品が製造できない」というものも多く、長期的な視点でリスクを回避し、事業継続を第一に考えることが求められます。そのため当社は戦略的な在庫の備蓄や長期雇用・年功序列の維持など、最近の経営手法とは真逆ともいえる施策を実施しています。本書ではそうした経営スタイルのほか、オプション取引を保険として活用し為替リスクから会社を守る実践的な方法なども紹介しました。

――反響はいかがですか？

ビジネス書はあまり読まないけれど、これほど参考になった本はないという感想を寄せてくれた事業主の方もおられました。執筆の苦労が報われた気分です。本書が皆さんのお役に立てることを願っています。




直観力と哲学なき経営は淘汰される
1500円（税抜き）ギャップジャパン刊

（おおた・ともあき）1964年東京都生まれ。米国サザンメソジスト大学経営学修士（MBA）。大手外資系企業勤務後、父親が社長を務める城北化学工業に入社。2001年父親の急逝に伴い、36歳で同社社長に就任。リーマンショック後、5期連続増収を記録するなど、社長就任時から売り上げを倍増させた。独自の経営哲学を実践し、後継者難の時代に一石を投じている。